

マルクス価値論の一考察

鈴木重靖

目次

1. 古典派とマルクスの労働価値説の基本的相違とは何か？
2. マルクスのいう抽象的労働とは現実に存在するものなのか？
3. マルクスはどのようにして抽象的労働の存在を証明しようとしたか？それは成功したか？
4. マルクスの等式は果たして意味のあるものか？
5. マルクスは交換価値をどのようにみていたか？その意図は何処にあったか？

1. 古典派とマルクスの労働価値説の基本的相違とは何か？

マルクスの価値論がリカードの投下労働価値説を継いだものであり、それをさらに徹底させたものであるということ、そしてまたこのことによつて、それまでの労働価値説をいわば完成させたものであるということについては、大方の認めるところである。この点に関するかぎりは、マルクスの労働価値説も一種の労働価値説であり、これまでの労働価値説を発展させたというだけにすぎない。

しかし、マルクスの労働価値説とこれまでの労働価値説とは基本的な相違がある。それは、これまでの労働価値説が、ただ、資本主義の生産や分配また交換といった資本主義のメカニズムを説明するだけの理論的用具

にとどまっていたのに対して、マルクスの労働価値説はこれにとどまることなく労働の搾取＝剰余価値論と明確に結びついており、その上で資本主義のメカニズムを批判的に分析しているということである。つまり、これまでの労働価値説——その代表的なものは古典派のそれであるが——が、資本主義を基本的には肯定する用具として利用されているのに対して、マルクスのそれは資本主義の否定のための、そして社会主義の到来を予告するための武器として利用されているということである。

労働価値説というものは、それがマルクスのものであろうと古典派のものであろうと、労働の搾取と結び付く可能性がある。なぜなら、この説は価値を生むものは労働だけであるというのだから、資本を提供するものや土地を提供するものが、これらと労働を結び付けることによって得る価値の部分は、すべて労働の成果から受け取ったものであるということになるからである。つまり労働者が働いた成果を資本家や地主が受け取るあるいは奪いとるということになるからである。しかし、それにもかかわらず、スミスやリカードの労働価値説が労働の搾取論にまで発展しなかった理由は、歴史的背景としては次のことにあると思われる。

スミスについていえば、彼が労働価値説を考えだしたころは、イギリスは産業革命期に入ったばかりであり、ここでは、機械の導入はまだきわめて不十分で、道具と呼んだほうがよいような器具が中心のマニファクチュアがなお生産の支配的な形態だったのである。工場内では協業と分業が進んでいたとはいえ、生産過程ではまだ労働が主要な役割を演じており、資本がそこにおいて大きな役割を演じているとは考えにくかったのである。したがって、スミスも、資本——その現物形態は道具や中小規模の工場などであるが——もまた結局は労働によってつくられるものと考え、最終的には生産物の価値はすべて労働から生まれるものと考えようになったのである。

また、リカードについていえば、彼が労働価値説を論じたころは、既に産業革命は進行しつつあり、生産過程に機械も導入され、資本の役割も増

大し、それとともに、従来の労働が排除されるという面がないではなかった。しかし、リカードの時代のイギリス資本主義は形成期にあり、全体として機械化によって、生産力は増大し、消費財の価格は低下し、産業は発展していったので、彼は機械化の進行とそれに並行する資本蓄積の増大は社会の発展に寄与しているものと考えていた。リカードは労働に機械が代わるという点で、資本家と労働者との利害対立に気づいていたけれども、^(註1)彼はこれを資本家と地主との利害対立ほど重視せず、したがって、資本家による労働者の搾取といった階級対立にまで問題を拡大するようなことはなかったのである。

これまで述べたような、古典派の労働価値説が労働の搾取つまり剰余価値論にまで発展できなかったという理由は、歴史的背景としてのそれである。しかし、もう一つ重要な理由がある。それは古典派の労働価値説そのものに内在するものである。古典派のいう価値を生む労働とは、ピンをつくる労働とか、靴をつくる労働とか、また麦をつくる労働とかいうそれぞれ異なった支出形態をもつ具体的労働のことである。これらの労働は、ピンや靴や麦をつくるために、それぞれに応じて、異なった道具や材料や土地を利用しなければならない。これらの生産要素なしには、したがってまたこれらの生産要素の提供者なしには、これらの生産物ができないことは明らかである。したがって、ピンや靴や麦といった価値をもった物をつくるためには、労働の提供者である労働者と、これらの生産要素の提供者である資本家や地主との協力が必要ということになる。ここでは労働者と資本家や地主との協力関係は存在しても、対立関係や搾取関係は存在しないことになる。

もし、価値物を生産することにおいて、労働者と資本家・地主との間に協力関係ではなく、対立関係や搾取関係を見出そうとするならば、具体的な形をもった生産要素との結合とは関係のない、せいぜい形式上の抽象的な生産要素との結合だけを想定すれば十分な、ただエネルギーを支出しているといったような、形のない、抽象的な労働を考えだす必要があった。

このことによって、資本や土地したがってまた資本家や地主を価値生産から完全に排除できるからである。リカードを含め古典派はこのような労働を考え出す必要はなかった。しかしマルクスには必要であった。というよりこのような労働を考え出すことは、彼にとって、いわば至上命令だったのである。なぜなら彼は資本主義社会の打倒と社会主義社会の建設を目指す革命家であったし、また既に自分が考えだしていた唯物史観において、資本主義社会における資本家による労働者の搾取と両階級の相いれない敵対関係＝階級闘争を説いていたからである。

マルクスは資本による労働の搾取を説明するために、抽象的労働あるいは抽象的人間労働という概念を考えだしたが、このことによって、彼は、実際に生産に従事している労働、それぞれの生産要素と結びついてそれぞれ異なった生産物を生産している現実の労働を、価値を生む労働から完全に排除してしまった。そしてこの現実の労働を具体的労働あるいは具体的有用労働と呼んだ。かくしてマルクスにとっては、価値を生む労働はこの抽象的労働のみであり、具体的労働は価値を生むこととは全く関係のないものとなったのである。

このように、資本による労働の搾取という理論つまり剰余価値論と労働価値説とを結びつけることができるかどうかは、抽象的労働といったものを考え出すことができるかどうかということに掛かっていることになる。マルクスは考え出すことができたが、スミスはできなかつたし、また、リカードはその考えに若干近づいたとはいえ、やはり最終的にはできなかつた。というより、彼らにはその必要がなかつたのである。それ故に、マルクスは資本主義の階級的対立を、スミスやリカードは資本主義の階級的協調を説くこととなったのである。

(注1) リカードはこれについて次のようにいっている。「私は、機械を人間労働に代用することは、労働者階級の利益にとっては屢々極めて有害なることを、納得するにいたつたのである。」(「経済学及び課税の原理」小泉信三

訳, 岩波文庫, 下巻, 1957年, 133ページ。)

2. マルクスのいう抽象的労働とは現実に存在するものなのか?

では、マルクスはこの抽象的労働をどのように説明しているであろうか。それは、「人間の脳や筋肉や神経や手などの生産的支出」^(註2)「生理学的意味での人間の労働力の支出」^(註3)であり、「どのようにしてまたどんな (Wie und Was) ということは問題とはならず、ただどれだけ (Wieviel) ということのみが問題」となるような、つまり「質をもたないで量だけをもつ」^(註4)ような、「無差別な人間労働の、すなわちその支出の形態にはかかわりのない人間労働力の支出」^(註5)「人間労働一般の支出をあらわす」^(註6)といった、そういう労働のことである。

このようなマルクスの価値を生むところの抽象的労働に関する説明については次のような疑問が生ずる。第一に、果たしてこのような労働が現実に存在するかということである。ただ量だけがあって、質のないような労働の存在が考えられるかということである。現実に存在する労働は質と量の双方をもつ具体的な労働のみではないか。そういう労働でなければ物を生産することはできないのではないか。物が生産されなければ、勿論価値も生産されないだろう。このような抽象的な労働というのは、ただマルクスの頭の中の中にのみ存在しうるものではないか。^(註7)

第二に、一步譲って、マルクスのいうような「脳や筋肉や神経や手などの支出」^(註2)「生理学的意味での労働の支出」といったような具体性のない労働一般の支出といものの存在が考えられたとしても、果たしてこのような労働を人間の労働と考えることができるであろうか。マルクスはこれに「人間の」とか「生産的」とかいう言葉を付してしるけれども、単にそれは言葉を付したというだけであって、なんら意味のないものではないか。実際に具体的なあれこれの生産物の生産とは関係のない、ただ脳や筋肉や神経などの支出というものならば、それがどうして人間のそれであるということになるのか。猿でも脳や筋肉や神経や、また手に類するものをもってい

るし、それらを支出しているのである。マルクスが抽象的労働を、また抽象的人間労働 (abstrakt menschliche Arbeit) と呼び、わざわざ人間の (menschlich) という言葉を付けたのは、彼がこのことに気づき、言い分け的に付けたと考えられないこともない。しかし人間という言葉が付けたからといって、それが人間になるわけではない。人間の労働が人間の労働たる所以は、まさに人間が道具や機械とともに労働することによって、靴だとか衣服だとか具体的に形をもった物をつくるからであって、単に筋肉だとか神経だとかを支出するからではない。

第三に、一体、具体的な形のない抽象的な労働の支出でもって、値うちのある、それでもって他の財と交換しうる価値つまり交換価値をもった生産物をつくれるだろうか。ある財が、他の財と交換しうる能力をもっているのは、その財が、それを求める購入者の役にたつからである。つまり購入者のための効用、使用価値をもっているからである。このような交換能力のある効用、使用価値をつくることができるのは、まさに具体的な労働であって、単なる脳や筋肉や神経の支出ではない。

以上からして、マルクスの考えだした抽象的労働といったものは、その存在すら疑わしいものであるということ、したがってまたそれから導きだされる彼の労働搾取説＝剰余価値説も疑わしいものであるということが明らかにされたと思うが、しかしマルクスは、あくまで抽象的労働の客観的存在を主張する。彼によれば、商品社会では商品交換そのものが、現実に客観的に労働を抽象化しているのであって、抽象的労働の存在が認められるのは、別に彼が頭の中で考えたからでもなければ、彼が資本による労働の搾取を説明したいという自分の願望からでもないのである。そこでこのマルクスの云うところを聴き、その正当性を吟味してみよう。

(注2) マルクス「資本論」、第一巻、マルクス・エンゲルス全集、23 a、大月書店、59～60ページ。

(注3) 同上、63ページ。

(注4) 同上, 61ページ。

(注5) 同上, 52ページ。

(注6) 同上, 60ページ。

(注7) ゾンバルトはいつている「彼(マルクス)のいう価値は、決して経験的事実ではなく、一つの思想上の事実である。」「価値概念は、我々が経済生活を理解するために用いる、吾人の思考の補助手段である」(ウエルネル、ゾンバルト、「カール・マルクスの経済学体系批判」、但し、バーム-バベルク、「マルクス学説体系の終焉」、竹原八郎訳、日本評論社、1931年、170ページおよび179ページより引用)。ゾンバルトはここで、マルクスの価値したってが抽象的労働がマルクスの頭の中の存在であって、客観的存在ではないといっている。しかし、ゾンバルトはそれでも、それらは思考の補助手段として、経済現象を理解する上で一定の意味はあると考えている。が、この考えは、これは大いに疑問である。

3. マルクスはどのようにして抽象的労働の存在を証明しようとしたか？それは成功したか？

マルクスは彼のいう抽象的労働の客観的存在を証明するために次のような論理を展開する。「二つの商品、たとえば一着の上着と10エレのリンネルをとってみよう。前者は後者の二倍の価値をもっており、したがって、10エレのリンネル=Wならば、一着の上着=2Wであるとしよう^(注8)」。そうすると、20エレのリンネル=一着の上着という等式、つまり、20エレのリンネルは一着の上着に値するという等式が成立する^(注9)。しかし、この等式の左辺のリンネルと右辺の上着とは違う種類の財であり、違う使用価値をもつものである。このままでは等式になりえない。この等式が成立するためには、両者つまり左辺と右辺に共通するものがなければならない。マルクスはいう「この等式はなにを意味しているのか？同じ大きさの一つの共通物が、二つの違った物のうちに、(つまり20エレのリンネルと一着の上着のなかに)存在するということである。だから、両方共或る一つの第三のものに等しいのであるが、この第三のものは、それ自体としては、その一方でもなければ他方でもないのである^(注10)。」と。

この共通する第三のものとは、両者が労働生産物であるということ考

慮すれば、労働ということになる。マルクスはいう「そこで商品体の使用価値を問題としないとすれば、商品体に残るものは、ただ労働生産物という属性だけである。」^(註11)と。この労働は等値されている以上全く同質のものでなければならない。つまり具体的なリンネルをつくる労働とか上着をつくる労働とかであってはならない。これらは異質の労働である。したがって、ここでいう等質の労働とは「だれでも普通の人間が特別の発達なしに、自分の肉体のうちにもっている単純な労働力の支出」^(註12)「生理学的意味での人間の労働力の支出」としての「同等な人間労働または抽象的人間労働」^(註13)ということになる。

以上が、商品交換のあるところ抽象的労働もまた存在する、あるいは存在しなければならぬ、というマルクスの論理である。いま、ここでの商品を労働生産物だけに限るといふ、マルクスの身勝手さも問題ではあるが、これについては、バーム-バベルクなどすでに多くの人々によって批判されてきたので、^(註14)ここではこのマルクスに対する批判はこれを省略することにしたい。そこで、ここでは一応マルクスにしたがって、商品はすべて労働生産物であると仮定しよう。しかし、そうだとすると、マルクスの抽象的労働の存在を証明しようとする論理はおかしい。

マルクスは、20エレのリンネル＝一着の上着という等式は、何か両者に共通するものをもってこなければ成立しないようにいっているが、そんなことはない。彼自身がすぐ前でいっているように、この等式は $2\dot{W} = 2\dot{W}$ 、つまり20エレのリンネルの価値＝一着の上着の価値を省略して表現したものである。この省略されていない等式ならば、そのまま等式は成立している。この等式は10エレのリンネルの価値(W)の2倍、つまり20エレのリンネルの価値(2W)は、一着の上着の価値(2W)に等しいということ(2W=2W)を表現しているのである。あらためて左辺と右辺に共通する第三者をもってこなければ成立しない、といった等式ではない。

ところが、マルクスは自分がすぐ前でいっていた20エレのリンネル＝一着の上着という式は、 $2\dot{W} = 2\dot{W}$ つまり20エレのリンネルの価値＝一着の

上着の価値という式を省略して表示したものであるということを(故意に)忘れて、その後の説明において、この等式から価値という文字を完全に切り除いてしまっている。そして、リンネルと上着との使用価値が互いに違えば、そのままでは、両者の間で等値関係つまり等式は成立しない。それにもかかわらず、商品の交換はこの両者を等値関係においている、つまり等式として成立させているのだから、両者に共通するものがあるはずである、というのである。しかし、いま述べたように、この式は違った使用価値をもつ商品の等しい価値を表示している式なのであって、違った使用価値をそれ自体で等しいと表示している式ではない。(後述するように、ここで価値というのは正しくは交換価値でなければならない。しかし、ここではマルクスの表現にしたがった。)だから、第三の共通物などを考える必要のないものである。この式から第三の共通物を引き出そうとするマルクスの論理の展開は、存在もしない抽象的労働をつくりだそうとする言葉のスリカエであり、言葉によるゴマカシ以外のなにものでもない。論理的にもまた理論的にも認められるものではない。しかし、この問題はマルクス価値論の根幹にかかわる問題である。もう少し試みてみよう。

(注8)「資本論」, 23 a, 56ページ。

(注9) 同上, 65ページ。

(注10) 同上, 50ページ

(注11) 同上, 51ページ。

(注12) 同上, 60ページ。

(注13) 同上, 63ページ。

(注14) ベーム-バベルクはいつている、「交換価値の基礎に横たわる共通物を、探求する場合に、労働生産物ならざる一交換価値を有する一財貨を排除することは、方法上死罪に値する罪である」(ベーム-バベルク, 前掲書, 112ページ。)

4. マルクスの等式は果たして意味のあるものか?

等式は左辺のものと右辺のものとを比較するという意味が含まれてい

る。A = 2B という式では、A は B の 2 倍である、という A と B との比較の意味が含まれている。比較している以上、A と B とは質的には同じものであり、その量的相違だけが比較されているということになる。太郎の身長は次郎の体重の 2 倍である、というような比較は意味をなさない。身長なら身長、体重なら体重というように、同じ質のものが比較されなければならぬ。しかし、いま太郎の身長が次郎の身長の 2 倍だという場合、式であらわせば、太郎 1 人の身長 = 次郎 2 人分の身長、簡単に表示すれば、1 太郎の身長 = 2 次郎の身長という場合、われわれはこの両者の間に、つまり左辺と右辺の間に、太郎の身長でもないまた次郎の身長でもない第三の共通物を求めようとするだろうか。勿論そういうことはしない。しかし、マルクスならば、この式を 1 太郎 = 2 次郎と書き改めて、太郎と次郎との間に、太郎でもないまた次郎でもない第三者として身長というものをもって来るだろう。

マルクスの論理がおかしいことは明らかである。第一に、1 太郎 = 2 次郎という式はそれ自体では意味をなさない。前にあげたマルクスの商品に関する式であれば、 $20 \text{ エレのリンネル} = 1 \text{ 着の上着}$ という式も、それ自体では意味をなさない。これらの式では、太郎と次郎の何が比較され等値されているのか全くわからないし、リンネルと上着の何が比較され等値されているのかも全くわからない。前の式では、体重かもしれないし、身長かもしれないし、学校の成績かもしれない。後の式では、重さかもしれないし、体積かもしれないし、値段かもしれない。後の式については、ただ、マルクスが自分の頭の中で、勝手に、比較され等値されているのは価値なのだと思っており、そういつているに過ぎない。客観的に表示されている式ではこのようなことは何等表示されておらず、全く意味をなしていない式なのである。

第二に、マルクスが $20 \text{ エレのリンネル} = 1 \text{ 着の上着}$ という等式をつくり、その上で、これらの或いはこれらの使用価値のいずれでもない第三者としての価値、あるいは抽象的労働が存在するというのは、丁度、1 太郎 = 2

次郎という等式をつくり、太郎でも次郎でもない、第三者としての身長というものが存在するというのに等しい。しかし、身長は太郎の身長であり、また次郎の身長であって、太郎とか次郎とかを離れて、身長一般というものが宙に浮いて存在するのではない。同様に価値もリンネルの価値であり、上着の価値であって、リンネルでも上着でもないような第三者としての価値など存在しない。上の無内容な等式を正確な等式にするためには、1太郎の身長=2次郎の身長、また20エレのリンネルの価値=一着の上着の価値、正しくは、20エレの交換価値=一着の上着の交換価値としなければならない。

第三に、マルクスが第三者的存在として抽象的労働をもってきたのは、彼が、価値とは労働の対象化したものだ、といたかったからである。マルクスはいっている。「ある使用価値または財貨が価値をもつのは、ただ抽象的人間労働がそれに対象化または物質化されているからでしかない。」^(注15)「価値としては、すべての商品は、ただ、一定の大きさの凝固した労働時間でしかない。」^(注16)しかし、これは正しくない。たとえ、いま、リンネルも上着も共に労働生産物だとしても、この両者には一かけらの労働も含まれてはいないのである。リンネルも上着も労働の成果によってできたものではあるが、それは過去のことである。それらは、いまや、ただ財として存在するだけであって、それらが存在するようになる過程がどうであったかは、それ自体にはもはや関係のないことである。つまり、それが労働でできたものか、それともその他の過程で、たとえば、外国から輸入されてきたものか、そういったこととこの財の存在自体とは関係のないことである。したがって、その財に固有な性格としての交換価値（マルクスによれば価値）が、労働であるとか、労働の対象化したものであるとかいうことはできないのである。もっともこのことは、その財の交換価値の大きさが、それができるまでの過程の状況によって、何ら影響を受けないということを意味するものではない。しかし、このことは、交換価値そのものが、労働であるとか、労働の対象化したものであるとかいうこととは、

全く別問題である。

第四に、太郎の身長は太郎に固有なものであって、別に次郎の身長がなくても存在するものである。次郎の身長についても同様である。太郎の身長は次郎のそれと比較してみて、あるいはイコールで結んでみて、はじめて、その存在がわかるわけではない。わかるのは次郎より2倍も高いという身長の比較であって、身長が存在そのものではない。同様にリンネルも上着もそれぞれ固有の交換価値をもっている。リンネルの交換価値と上着の交換価値とが比較され、20エレのリンネルの交換価値＝一着の上着の交換価値と等値されてはじめて、それぞれの商品の交換価値の存在がわかるといったものではない。交換価値はそれぞれの商品にすでに固有のものとして存在しているのである。ただ、これらが後になって、その大きさが比較されたというにすぎない。マルクスも、はじめに、10エレのリンネル＝Wの価値、一着の上着＝2Wの価値とそれぞれ固有の価値をもっているようにいっている。その上で両者の価値の大きさを比較している。しかし、彼は論理の展開過程で、それを逆さまにして、20エレのリンネル＝一着の上着と両者を等値関係におき比較してみて、はじめて両者に共通なものとして価値の存在が明らかになるというように論理を展開するのである。これは、まさに論理のすりかえにほかならない。ここにも、価値や抽象的労働という実際にはありもしない概念を生み出すことによって、資本による労働の搾取、剰余価値の創出というこれもありもしない概念を作りだそうとするマルクスの意図が隠れている。

(注15)「資本論」, 52ページ。

(注16) 同上, 53～54ページ。

5. マルクスは交換価値をどのようにみていたか？ その意図は何処にあったか？

マルクスの等式を正しく表示するためには、20エレのリンネルの交換価

値＝一着の上着の交換価値としなければならない。ところが、既にみたように、マルクスはこの等式から交換価値という言葉は勿論のこと、彼のいう価値という言葉すらも取り去ってしまい、等式としては成立もしなければ意味をもたない20エレのリンネル＝一着の上着という式をもってきて、今後はこれを等式として成立させるのだと云って、抽象的労働とかその対象物としての価値というものを考えだすのである。そのため、マルクスにあっては、交換価値という本来商品がもっているものが消え失せてしまうのである。

しかし、商品から交換価値を除いてしまうことはできない。これでは、商品とは交換価値をもつ財のことである、という商品の定義そのものに反する。かといって、マルクスのいう価値のほかに交換価値を残しておけば、一つの商品に使用価値と交換価値と価値という3つの価値が存在することになる。これは、誰が考えてもおかしい。このディレンマから逃れる唯一の道は交換価値を価値の現象形態にしてしまうことである。マルクスはいう「われわれも、じっさい、諸商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている価値を追跡したのである。また、われわれは再び価値のこの現象形態に帰らなければならない。^(注17)」^(注18)「およそ交換価値は、ただ、それとは区別される或る実質の表現形式、『現象形態』でしかない」と。

しかし、たびたび指摘したように、抽象的労働というものも存在しなければ、その対象物である価値というものも存在しない。存在しないものが存在するものとしての交換価値の本質となることはないし、後者が前者の現象形態となるようなこともありえない。^(注19)このような、「交換価値とは価値の現象形態である」といった混乱したマルクスの説明は、交換価値そのものに対する彼の誤った見方と堅く結びついている。

マルクスはいう「ある一つの商品、たとえば1クォーターの小麦は、x量の靴墨とか、y量の絹とか、z量の金とか、要するにいろいろ違った割合の他の諸商品と交換される。だから、小麦は、さまざまな交換価値をも

っているのであって、ただ一つの交換価値をもっているのではない。しかし、 x 量の靴墨も y 量の絹も z 量の金その他も、みな1クォーターの小麦の交換価値なのだから、 x 量の靴墨や y 量の絹や z 量の金などは、互いに置き換えられうる、また等しい大きさの、諸交換価値でなければならない。^(註20)マルクスはここで、1クォーターの小麦がさまざまな交換価値をもっており、 x 量の靴墨も y 量の絹も z 量の金もそれぞれ1クォーターの小麦の交換価値だといっている。

そんなことはない。 x 量の靴墨は x 量の靴墨であって、それはそれとして独自の使用価値と交換価値をもっており、1クォーターの小麦の交換価値ではない。同様に y 量の絹も z 量の金もそれぞれ独自の使用価値と交換価値をもっており、1クォーターの小麦の交換価値とは何の関係もない。

(ただ、それらが小麦の補完財や競合財であれば、小麦の交換価値の大きさに影響を与えることはありうるけれども)。それぞれは、市場という交換の場で相互に比較されてみてはじめて、その時点で、それぞれが独自にもっていたその交換価値の大きさが互いに比較され、その結果等しいのだということがわかるのである。

それぞれの財は、たまたま交換されてはじめて商品になるといったようなものではない。原始社会での物物交換ではないのである。マルクス自身が資本論の冒頭でいっているように、ここは、「資本主義的生産様式が支配的におこなわれている社会」なのである。すでに、それぞれの財は、それぞれ独自の使用価値と交換価値をもった商品として市場に登場してくるのである。この登場の過程で、それぞれの商品はその使用価値の社会的評価を受けながら、需要や供給条件によって交換価値としての大きさがきまるのである。したがって、これらの条件が変われば、その交換価値の大きさも変わることは勿論である。だが、マルクスいうように「1クォーターの小麦がさまざまな交換価値をもっている」のではない。1クォーターの小麦の交換価値が時や場所に依じて変動するだけである。

商品は使用価値と交換価値という二つの性格をもっている。使用価値と

は効用をもつということ、つまり人間のなんらかの欲望を満たすために役立つという性格である。そして交換価値とはこの効用を手放すことによつて、それとの交換に他の財なりサービスなりを獲得できる能力のことである。交換価値はその財のもつ効用が、人々のそれに対する評価を通して、彼らによつてどの程度強く意識的に要求されるかということによつて、その大きさが左右される。その意識的要求度はその財の効用の度合い（人々の欲望を満たす程度）とそれを入手することの困難さに比例するといつていい。日常用語で表現すれば、人々が欲しがり、かつ簡単に入手できないものは高価だということである。

このように、使用価値に対する人々の態度が交換価値の大きさに大きく影響し、こういう意味で使用価値と交換価値とは切り離し難く結び付いているのである。ところが、マルクスによれば、両者は全く関係のないものなのである。彼はいつている。「使用価値としては、諸商品は、なによりもまず、いろいろ違った質であるが、交換価値としては、いろいろ違った量でしかありえないのであり、したがって一分子の使用価値を含んでいないのである。」^(註21)「諸商品の交換関係そのものなかでは、商品の交換価値は、その使用価値にはまったくかかわりのないものとしてわれわれの前に現われた。」^(註22)

マルクスがいうように、交換価値を生むことが、使用価値つまり具体的な財をつくることに関係がなければ——前で述べた支出労働でいえば、両者はまったく異なった種類の労働の産物だとすれば——、その財をつくるために実際に役立つ機械や設備また原材料なども交換価値を生むことには何ら関係なく、したがってまた、これらの生産要素を提供した人々、投資家たちも何ら交換価値を生むことには関係のないものとなる。つまり、マルクスによれば、投資家たち、またその投資家の意向にしたがって動く企業家たちは、交換価値——マルクスではこれは実は価値なのであるが——を生むためには、全く役に立たない人間どもなのである。

交換価値およびその本質としての価値を生むことにおいて全く役立たず

の資本家や企業家たちが、こともあろうに、労働者たちが彼らの「脳や筋肉や神経や手」など、その生身の肉体を磨り減らして、つまり抽象的人間労働を支出して生み出した交換価値＝価値の一部を、剰余価値として、奪い取るのである。このような不当なことが許されてよいものかというのが、ロマンチストというより空想家マルクスの言わんとするところである。ここでは、投資家や企業家と労働者との生産における協力関係は完全に消え失せている。あるのは、ただ、全く相いれない両者の敵対関係のみである。

マルクスの剰余価値論の誤謬については、彼の労働力商品説の誤謬を指摘することを通して、私はこれまでいくつかの論文で述べてきた^(注23)。したがって、ここではこれ以上彼の剰余価値論の誤謬について述べることは差し控えたい。ただ、ここで強調しておきたいことは、これまで述べてきたことから明らかなように、マルクスの剰余価値論＝労働搾取説の誤謬は、すでに彼の交換価値論および価値論の中に潜んでいたということである。

ケインズはマルクスの資本論について「神学上の著作とともに、言語による創造物のうち、たぶん最も無益な、どのみち最も退屈なしるもの^(注24)」と述べているが、資本論のすべてについて、このケインズの言述は当たっていないとしても、少なくともこの中の価値論と剰余価値論に関するかぎり、彼のこの言葉を否定することは困難である。何故なら、上述したように、マルクスは資本論で、ありもしない抽象的労働とかその対象物としての価値とかについて、実にクドクドと述べ、それをあたかも絶対的な存在として認め、その上で、膨大なページ数を使って、剰余価値論にまで理論を展開していき、資本主義の搾取的性格を明らかにしたつもりでいるが、そのありさまは、ケインズでなくとも、われわれをして、この書を資本主義に対する科学的冷静さをもって書かれた著書というよりも、それに対する信仰に近い強い憎悪をもって書かれた、退屈な一種の宗教書と言いたくさせるからである。

(注17)「資本論」, 23 a, 64ページ。

(注18) 同上, 50ページ。

(注19) 大木啓次氏は、これに関して次のようにいっている。「ある商品の交換価値は、その商品に内在する商品としての本質的なものである。商品の交換価値のほかに、その交換価値を現象形態とするような『ある共通物』などはおよそありえないのである。」(同氏, 「マルクス経済学を見直す」, 1994年, 平原社, 111ページ。)

(注20) 「資本論」, 23 a, 50ページ。

(注21) 同上, 51ページ。

(注22) 同上, 52ページ。

(注23) 拙稿, 「マルクスの社会主義論——資本主義論との関連において——」, 広島経済大学経済研究論集, 第14巻, 第2号, (1991年6月); 「マルクスの経済学とマルクス経済学」, 経済評論, 1993年5月号。

(注24) J. ケインズ, 「トロッキーのイギリス論」, 大野忠雄訳, ケインズ全集, 第10巻, 東洋経済新報社, 1980年, 87ページ。